螺旋をめぐって……生命の原理

2009年4月25日(土)14時開演

セシオン杉並

［助成］―杉並区文化協会によるすぎなみ文化芸術活動助成基金助成事業
［主催］―ハーツウィンズ
［共催］―知と文明のフォーラム
［協賛］―ヤマハ株式会社
［後援］―コマキ楽器　株式会社ブルーマレット　フォニックス・プロモート　平凡社
［協力］―株式会社全音楽譜出版社　株式会社ヤマハミュージック東京

レクチャーコンサート：世界音楽入門II

新実徳英の世界

宇宙論としての音楽、思想としての音楽 ……北沢方邦

◉「世界音楽」とはなにか。いまわれわれが耳にする近代西欧の古典音楽、いわゆるクラシックは、作曲家個人の主観的な感情の表出に専念してきた。だが同じ「クラシック」でも、イスラームやインドの古典音楽、あるいはわが国の御神楽や雅楽にはじまる古典音楽は、それぞれの種族の宇宙論の音による表現である。アフリカやパプアの音楽も同じであり、それが人間の音楽の原点であるといえる。

◉他方、主観的な表現の精密化をはかってきた西欧の古典音楽は、それを支えてきた主観性の表現体系、つまり和声の体系の崩壊によって、二十世紀の音楽を混沌のなかに投げだしてしまった。その結果、音楽は作曲家個人の内面やその生きた時代とはまったく関係がなく、また音によって意味を表すこともない、純粋な音の構築物であるとする「絶対音楽の神話」が成立するにいたった。しかしこの「神話」ほど、二十世紀の先進世界全体を蔽ってきた哲学的で実体的なニヒリズムを象徴するものはない。

◉だが主観性が解体したからといって、ニヒリズムの荒涼とした「無意味の砂漠」をさまようことはない。すでに主観性の音楽の時代にも、主観的な情念を超えて、その時代の深い思想を表現する音楽家たちがいた。たとえばベートーヴェンである。

◉彼の『交響曲第三番エロイカ』や『ピアノ協奏曲第五番』あるいは『エグモント』や『フィデリオ』は、フランス革命とそれにつづくナポレオン戦争の混沌のなかで、ルソーが予告し、カントがその哲学的根拠を探った、「自由・平等・友愛」のモットーに象徴される同時代のもっとも深い思想を、音によって表現している。また『第九交響曲』や最後の諸四重奏曲に代表される後期の作品は、彼の書き残した『日記』が証明しているように、フリーメイスンやインドなど、中東から東洋にいたる古代思想や世界観を踏まえた「世界音楽」にほかならない。

◉われわれは宇宙論の表現であるとする音楽の原点に返るとともに、近代音楽が到達したこの「思想としての音楽」という偉大な遺産を継承しなくてはならない。

◉今回、新実徳英の音楽を取り上げる意味はここにある。彼が、この二つの流れを統合し、二十一世紀音楽の新しい扉を開こうと、すぐれた試みをおこなっているからである。前回取り上げた西村朗が、どちらかというとインド的な壮大な宇宙論やそのドラマに惹かれているとすれば、新実は、老荘思想のもつ宇宙や大自然の飄々とした響きに魅力を感じているように思われる。「世界音楽」としてのこの二人の対照をあじわうのも興味深い。

◉今回は特に、グラフィックデザインという表現分野にアジア的宇宙論を復活させている杉浦康平氏を迎え、芸術と宇宙論について語り合いたい。

プログラム

プログラム❶［音楽と日本的霊性］

【レクチャー】
北沢方邦

【演奏】
魂の鳥…フルートとピアノのための
THE SOUL BIRD, for Flute and Piano(1996)

ソニトゥス ヴィタールスI…ヴァイオリンとピアノのための
SONITUS VITALIS I, for Violin and Piano(2002)

ピアノトリオ—ルクス ソレムニス
PIANO TRIO—LUX SOLEMNIS(2008)

——休憩——

プログラム❷［音楽と宇宙］

【対談】
新実徳英＋杉浦康平

【演奏】
風のかたち…ヴィブラフォンのための
SHAPE OF WIND, for Vibraphone(1990)

アンラサージュII…3人の打楽器奏者のために
ENLACAGE II, for 3 Percussionists(1978)

ヘテロリズミクス…6人の打楽器奏者のために
HETERORHYTHMIX, for 6 percussionists(1993)

〈演奏者〉
長尾洋史(pf)　永井由比(fl)
寺岡有希子(vln)　上森祥平(vc)
上野信一(perc)　フォニックス・レフレクション(perc)

音のコスモロジー……北沢方邦

［音楽は種族の宇宙論を表現する］

◉物理学の最新の宇宙論（コスモロジー）について語るまでもない。かつてすべての種族はそれぞれの宇宙論をもっていたし、またそれゆえにひとそれぞれの宇宙論があったといっても過言ではない。芸術とは、最終的にそうした宇宙論の表現であり、メタファー（暗喩）であった。

◉たとえばパプア・ニューギニアのイアトムル族は、いまでもロングハウスの暗闇でトーテム祖先の霊にかかわる秘密の儀礼をおこなうとき、美しく装飾された大小さまざまな笛をもちよって、砂時計型の太鼓がきざむ単純なリズムを背景に、わずかずつ入りをずらせながら密集した（不協和な）和声を吹き鳴らす。この霊妙なヘテロフォニーは、グーラという青い鳩の神秘な鳴き声を模倣したものであるが、彼らにとって鳥の世界はトーテム祖先たちの霊の世界のメタファーにほかならず、それは大型のスリットドラム（木製の空洞太鼓）がとどろかす滝や雷雨の響きと対となって、天と地、風と水などを象徴している。また二分する太陽半族（息子）と大地半族（母）の二つたこの二組の儀礼音楽は、それぞれ部族を二の半族になわれ、音としても社会組織としても彼らの宇宙論を表しているのだ。

◉こうした誤って未開とよばれる社会だけではない。インド古典音楽やバリ・ガムランにしても、すべての音や楽器はそれぞれの宇宙論の洗練された表現であり、メタファーにほかならない。だが近代社会あるいは音楽から、宇宙論はまったくといってよいほど失われてしまった。それはなぜか。

［近代（主観性）の音楽は限界に行きつく］

◉そこに近代に固有の〈主観性〉の概念が登場する。つまりデカルト以来近代の人間は、主観性という枠組みを通じてしか事物を認識できなくなってしまったのだ。もちろんそれはデカルトの罪ではないが、人間のみが神のコトバ（理性）を理解し、神に代わって世界を認識できるという近代の考えがそれをもたらした。その結果すべての芸術は、芸術家個人の主観性に映じた世界を描写するものとなり、とりわけ音楽は古典派以後、作曲家個人の感情の表現となっていった。ベートーヴェンの『第九交響曲』のように、時代の制約や悲劇的状況を超えて、壮大ではあるが人間主義的な宇宙論を表出しようとした作品は、ほとんど例外といってよい。ワーグナーの成功は、それ自体が主観性を超えている神話や伝説によるものである。

◉ドビュッシーやストラヴィンスキーの〈革命〉の意味はここにある。バリ・ガムランや中央アジアの音楽に霊感をえた彼らの初期の作品は、音楽を主観性や個人の感情から解放し、音をまず純粋なモノまたは記号として扱うことから出発した。『牧神の午後への前奏曲』や『春の祭典』などの画期的な意味は、音がふたたびメタファーや象徴の役割をとりもどし、神話的世界や宇宙論の表現の媒体となったことである。だが不幸なことに、物語としての神話や伝説は別として（彼らの革命的な作品がこうした物語にもとづくバレエ音楽であったことを思い起こそう）、主観性による世界の徹底的な世俗化と人間化の結果、現代社会から宇宙論はすっかり消滅してしまっていたのだ。こうして音楽的革命は一時期のものとして終わり、主観性に忠誠をつくす保守派は別として、作曲家たちは近代に固有の二元論的分裂にまきこまれることとなった。いうまでもなくそれは十二音からミュジーク・セリエルにいたる形式の徹底的合理化という客観主義か、主観性を実存にまで凝縮し、自己の内面の心象風景のみを描く究極の主観主義かの分裂であり、ウェーベルンにみられるように、両者はしばしば分かちがたくからみあっていた。

◉ここで二十世紀の音楽史を回顧する余裕はないが、要するに私のいいたいことは、こうした状況が打破され、宇宙論が失われた現代社会のなかで、むしろ芸術によってそれを積極的に再興しようというううごきが現れたのはごく最近のことだということである。とりわけ東洋と西洋の接点である日本の文明的位置を自覚し、いわば音楽の普遍文法を探ろうと出発したわが国の若い世代の作曲家たちに、私はほんとうの意味での脱近代（ポストモダン）の芸術を予感している。そのひとりがここでとりあげる新美徳英である。

［新実徳英は宇宙論を復権する］

◉彼の作風の特徴は、西洋であれ東洋であれ、あるいは日本の戦後であれ、過去の〈伝統〉の束縛からいっさい解き放たれた風のような自在さにある。たしかに彼は〈風〉と名のつくピアノ曲集や多くの室内楽を書いていて、とりわけ『風のプレリュード』は、彼がドビュッシーの正統な後継者であることを証明しているが、この印象はたんにそこからきているだけではない。その本質は、古典的な和声（歌曲集『白いうた・青いうた』）から彼独特の微妙に密集し、変転するヘテロフォニーにいたるまで、内面の必要に応じて繰りひろげる作曲技法の自在さに由来している。

◉ジュネーヴ国際バレエ音楽作曲コンクール大賞を受賞した作品『アンラサージュ』のフランス語の題名は、同時にこの多彩な糸を丹念に綯いあわせるようなヘテロフォニックな作曲技法を表しているが、このいわばパプアニューギニア風のヘテロフォニーは、彼が東洋的なものの核心と感じているものにほかならない。たしかにガムランやインド古典音楽、あるいはティベット楽劇などの根本にあるのは、音そのものがこのようなヘテロフォニーであるかどうかは別にして、意識的・無意識的に外界と内界、宇宙と個我とを微妙に綯いあわせていく〈集中〉と〈瞑想〉のモードである。尺八本曲に着想をえたとする『ヘテロリズミクス』にしても、一管によってでるという普化尺八の〈瞑想〉の根本を管弦楽化したものといえよう。

◉こうした作風の頂点のひとつが、『創造神の眼』であるだろう。ここには西洋・東洋の境界を超えた宗教的宇宙論があるだけではなく、工学部出身の作曲家にふさわしい最新の物理学的宇宙論の反映さえ感じられる。たしかにここにも風がある。太陽系宇宙を吹き抜ける眼にみえないプラズマとしての太陽風、大宇宙に木魂する一五〇億年前のビッグバン名残の電磁波の風、それらが共鳴して老荘のいう〈天籟〉を奏でる。そのうえ最新の超弦理論によれば、世界は〈超空間〉とよばれる多次元の時空であり、現世ともいうべき目にみえるこの宇宙に、いわば来世ともいうべき目にみえない多くの宇宙が重なっているという。『創造神の眼』は、そのような世界さえも予感させるひろがりをもっている。

◉このように、新実徳英は、音によってコスモロジーを復権させ、音によって精密な宇宙論的マンダラを描こうとする新しい世代の作曲家として、もっとも注目すべきひとりである。

――サントリー音楽財団「作曲家の個展1999――新実徳英」のプログラムより再録

音をめぐって……新実徳英

波動

宇宙は波動である。したがって大自然のすべてが波動である。もちろん私たちも。

◉私たちが感知できる波動はごく一部でしかないが、それでも人は太古より自分たちと共振する波動を感じて生きてきた。たとえば風である。それはやがて風が管を吹き抜ける笛となって、私たちの波動と共振する。すなわち魂を揺るがすことになるのである。

◉感動はここから生まれる。ただ一音の楽の音が私たちに染み入ってくるのは、この共振作用によるものなのだ、と思う。

風

私は十年ほど前から風、風音にとても魅かれ始め、《風韻》《風音(かざね)》《風を聴く》《風の螺旋(らせん)》《風のかたち》、はてはパイプ・オルガンと和太鼓とオーケストラのための《風神・雷神》などという曲まで作った。よくもまあ臆面もなく「風」を使いまくったものだと、われながらあきれている。

◉なぜこれほど風に魅かれることになったのかは自分でもよくわからない。たぶん、ちょっとカッコウつけていえば、「私の中でヨーロッパ的人間中心主義とアジア的自然中心主義がそれまでとは異なるレヴェルで相克を開始した」のと関係があるのだろう。

風をたんなる大気・空気の動きと考えるのではなく、この巨大なひとつの生命体＝地球の息吹であると考えるとき、私にとって風はたんなる風ではなくなったのだと思う。風に内在する霊性、などと言うとスゴイことになりそうだが、なに、簡単に言えば風もまた生命体だ、ということである。

◉音魂(おとだま)という言葉がある。私流に言い換えれば、これは一つひとつの音は生命を持っているということだ。佳(よ)い音とはより豊かな生命力を持っている音である。

◉旋律とはそのような一つひとつが生命体である音が、たがいに連鎖を作り、つながりあい、より大きなひとつの生命体となったものといえる。

◉私たちが旋律の美しさを直感するとしたら、それは自分という生命体とより大きなひとつの生命体となった旋律との間に働く共振作用のもたらすものにちがいないと思う。

創造

創造するものにとって知識・技術の修練は欠くことのできないものである。メチエなくしてはどのような種類の創造も不可能である。が、真の創造はそこから始まるのではない。

◉それをいったん忘れ、捨て去り、みずからを「空(くう)の器」としたとき、やがて天啓のごとくなにかが、「あるものの全体」がそこへやってくる。そのときはじめて、その「あるものの全体」をこの世のかたちとするためにメチエが働き始める。

◉美とは人間が創り出すものであるが、同時に発見させられるものであり、それゆえ、あらかじめ宇宙に、つまりは私たちの内に存在しているものであるとも私には思われるのである。

鳥

私はメシアンが鳥の歌をそっくり作品に取り込もうとしたことに大いに共感する。鳥を神の使いと考えたり、魂の実体化したものと考えたりするとき、それは私たちの音楽以前から存在した音楽であり、同時に私たちの音楽のよって来たるところと考えることもできるからである。その再生が音楽に新たな生命力をもたらしてくれる可能性もあるゾ、と私も思うのである。私自身、フルートとピアノのための《魂の鳥》(一九九六)という曲を作ったことがあるし、《弦楽四重奏曲》(一九九四)には〈鳥のカデンツ〉なる部分も挿入されている。

土地

民俗音楽と西洋音楽(あるいは私たちが作ろうとしている音楽)とは目的において、また結果において大きな違いがあるが、いずれの場合も〝土地の神々との交感〟という点において、それを意識する、しないにかかわらず共通するものがあると思うのである。

◉私たち人間は音を作り出してきたのではなく、音を受け取ってきた。そしてそれを人間の音に変えて発し、聴いてきたのではないか。そう思うとき、「音の沸き出(いず)る場所」と私たちの関わりはいっそう深い、根源的なものであるように思われてくるのである。

旋律

いまあらためて思うのは、人間が旋律を生みだす力、それを受けとめる人間の直観力の素晴らしさである。

音の闇

自分のまわりに、いわばア・プリオリ(無前提)に与えられているあらゆる音を、「異界＝神界」にいちど返す。すると私は「音の闇」の住人となる。そうして無音の世界にじっと耳をすまし、そこからどんな音がやってこようとしているのか、あるいは自分がどんな音を取りもどしたいと欲しているのかを感じとろうとする。これは私の今の作曲姿勢であり、「音の闇」にどのような音＝色彩＝意味が立ち返ろうとしているのかをひたすら待つ、というやり方なのである。

◉一つひとつの音の色彩は生命体のそれであり、「神界」からもどってきた音たちは、たとえそれらが既知のものであっても、新しく生まれ変わった音であり色彩であり生命体であらねばならない。

◉音楽はあくまでも人の営みであり、技術や方法論なしには一歩も進むことができないが、それを超えたところで、あるいはそれ以前の問題として、音＝色彩＝意味について考えてみなければならない。それが音楽を根本的に捉え直すことに真っすぐつながっていると私は思うからである。

愛

ある音楽を「理解する」、というとき、それはその素材や構造などの全体像を把握して理解する、というのではなく、じつはそのすべてを直感する、そして「愛する」ということなのである。

◉樹の素性を調べあげ、幹・枝葉・花・果実、そのすべてを観察し、手で触れる、それだけでは樹の「内側」は理解できないし、〝友達のように思っている〟心境に達しえないのと同様に、音の「外側」をどのように触れまわり、歩きまわったところで音楽の「理解」に、つまりは「愛」に至らない。

◉音楽という私たちに与えられたこのうえなく貴重な存在を、よりいっそう大切に、またより深くその存在の奥へと分け入っていきたいと私は願うのであるが、その手がかりはつまるところ「愛」なのである。

——新実徳英著『風を聴く　音を聴く』(音楽之友社刊)より抜粋・再構成

新実徳英の作品から聴こえてくるもの
—風の音、魂の声、生命の響き—

新実徳英作品目録より

オーケストラ作品

横竪…管弦楽のための
OHJU, for Orchestra(1986)
ヘテロリズミクス…オーケストラのための
HETERORHYTHMIX, for Orchestra(1991)
生命連鎖…小オーケストラのための
CHAIN OF LIFE, for Small Orchestra(1993)
創造神の眼(ピアノ協奏曲II)
EYES OF THE CREATOR-Piano Concerto II (1993)
風水…弦楽合奏、打楽器とチェレスタのために
FU-SUI(WIND - WATER), for Strings, Percussion and Celesta(1994)
宇宙樹—魂の路…二十弦箏とオーケストラのための
THE COSMIC TREE - Path of Soul -, for 20-string Koto and Orchestra(1996)
焔の螺旋…オーケストラのための
SPIRAL OF THE FIRE, for Orchestra(1997)
風神・雷神…大和太鼓、オルガンとオーケストラのための
FUJIN-RAIJIN, for Japanese Big Drum, Organ and Orchestra(1997)
沈黙(しじま)へ…弦楽オーケストラのための
TOWARDS THE SILENCE, for String Orchestra(1998)
太陽風…オーケストラのための
SOLAR WIND, for Orchestra(1999)
アニマ ソニート…ソプラノとオーケストラのための
ANIMA SONITO, for Soprano and Orchestra(2002)
ヴァイオリン協奏曲〈カントゥス　ヴィターリス〉
VIOLIN CONCERTO "Cantus Vitalis"(2003)
森は踊る
FOREST DANCES(2003)
協奏的交響曲〈エラン・ヴィタール〉
SINFONIA CONCERTANTE "Elan Vital"(2006)

オペラ作品

シンフォニックオペラ—白鳥
Symphonic Opera "WHITE BIRD"(2005)

室内楽作品

纏…邦楽大合奏のために
TENN, for big ensemble of Japanese instruments(1976)
アンラサージュII…3人の打楽器奏者のために
ENLACAGE II, for 3 Percussionists(1978)
アンラサージュIII…2台のマリンバと2人の打楽器奏者のために
ENLACAGE III, for 2 Marimbas & 2 Percussionists(1980)
風韻I
FUIN I, for Alto Saxophone & Violoncello(1987)
風韻II…3本の尺八のために
FUIN II, for 3 Shakuhachis(1988)
青の島…2面の二十絃箏のために
OU-NO-SHIMA, for two 20-string Kotos(1989)
淡海
AU-MI, for Soprano, vln, vlc & pft(1989)
風音
KAZANE, for cl,vln & vlc(1989)
風を聴く…邦楽大合奏
HEARING THE WINDS, for big Ensemble of Japanese Instruments(1990)
倭しうるはし
YAMATOSHI-URUWASI, for Baritone & pft(4hands)(1988)
劫のかなたへ…十七絃と箏群のための協奏曲
FARAWAY FROM THE FAR PAST, Concerto for 17-string Koto & Koto Ensemble(1987)
蓮華の舞
RENGE-NO-MAI, for 2 Shakuhachis & 4 groups of Kotos(1993)
青の神歌(おうのニーリ)
SACRED SONG IN BLUE, for 3 Koto players(1993)
ヘテロリズミクス(旧題：プラネット・ダンス)
HETERORHYTHMIX(ex-title "PLANETS DANCE"), for 6 percussionists(1993)
樹を聴く…邦楽大合奏
HEARING THE TREES, for big Ensemble of Japanese Instruments(1994)
アルジラ(夢の時間)
ALTYRRE - Dream Time, for 20-string Koto & vlc(1995)
風神・雷神
FUJIN-RAIJIN, for Japanese Drum & Organ(1995)
始原の真珠
A PEARL OF THE PRIME, for Shakuhachi, 20-string Koto, perc & cb(1995)
魂の鳥…フルートとピアノのための
THE SOUL BIRD, for Flute and Piano(1996)
光の園…ピアノ五重奏のための
GARDEN IN THE LIGHT, for Piano Quintet(1997)
妖精の輪…クラリネットとピアノのための
FAIRY RING, for Clarinet and Piano(1998)
ときのこえ…2本の尺八と3面の箏のための
VOCES TEMPORIS, for 2 Shakuhachis and 3 Kotos(1998)
ルクス オリジーニス…ヴァイオリン、クラリネット、チェロとピアノのための
LUX ORIGINIS, for Violin, Clarinet, Cello and Piano(2000)
ソニトゥス ヴィターリスI—V…ヴァイオリンとピアノのための(IIIのみvln.solo)
SONITUS VITALIS I, for Violin and Piano(2001)
アニマ カニート…ソプラノとオルガンのための
ANIMA CANITO, for Soprano and Organ(2002)
クラリネット スパイラル…2本のクラリネットのための
CLARINET SPIRAL, for two Clarinets(2002)
ピアノトリオ—ルクス ソレムニス
PIANO TRIO—LUX SOLEMNIS(2008)

ピアノ作品

風のプレリュード
PRELUDES OF THE WIND(1992)
旋法の虹I—VII(IV—VII未完)
MODE RAINBOW, 7 pieces for Two Pianos -Nos.4-7: unfinished-

独奏楽器作品

横竪…チェロ独奏のための
OHJU, for Violoncello solo(1987)
ヘテロリズミクス…HXのための
HETERORHYTHMIX, for Yamaha HX(1988)
風の螺旋
WIND SPIRAL, for Organ(1991)
風のかたち
SHAPE OF WIND, for Vibraphone(1990)
アニマII…三絃のための
ANIMA II, for Shamisen(2000)
天の眞名井…二十絃箏のための
AME-NO-MANAI, for 20 strings Koto(2001)

独唱作品

天の香具山
AME-NO-KAGUYAMA, Two Songs for Baritone & Piano 4 hands(1993)
アニマI…ソプラノとピアノのための
ANIMA I, for Soprano and Piano(2000)

合唱作品

悼歌
MOURNING SONG, for Mixed Chorus(1980)
アンラサージュIV
ENLACAGE IV, for 4 group of Female Chorus a cappella(1981)
常世から
FROM ETERNITY, for Mixed Chorus & pft(4hands)(1990)
インドラ
INDRA, for Male Chorus(vocalise)& Piano(1990)
サーラ
SARA, for Female Chorus(vocalise)& Piano(1991)
青の国
OU-NO-KUNI, for Mixed Chorus, perc & pft(1992)
風の雅歌
CANTICLES OF WINDS, for Mixed Chorus a cappella(1993)
宇宙を聴く
HEARING THE COSMOS, for Mixed Chorus & Percussion(1993)
生命の樹
TREE OF LIFE, for Mixed Chorus & Piano 4 hands(1993)
風の囁き
WHISPERING OF WIND, two pieces for Female Chorus a cappella(1993,1996)
魂の樹
TREE OF SPIRIT, for Female Chorus a cappella(1995)
魂の舟 葬送の音楽
BOAT OF SPIRIT - Funeral Music, for Mixed Chorus & Piano(1995)
魂の風
WIND OF SPIRIT, for Female Chorus and 17-string Koto(1996)
スピリチュアル・フィールド
SPIRITUAL FIELD, for Mixed Chorus a cappella(1996)
光の樹
ARBOR LUCIS, for Female Chorus a cappella(1997)
こだま・おとだま
KODAMA-OTODAMA, in Two movements, for Female Chorus and Piano(1999)
生命の讃歌
HYMN OF LIFE, Four pieces for Mixed Chorus and Piano(1999)
グーラ
GOURA, for Mixed Chorus a cappella(2000)
カントゥス スピリトゥム
CANTUS SPIRITUM, Three pieces for Mixed Chorus and Piano(2000)
ヴォーケス テラールム
VOCES TERRARUM, for Mixed Chorus a cappella(2000)
無量寿如来
MURYOJU-NYORAI, for Mixed Chorus a cappella(2001)
ルクス フィアット
LUX FIAT, for Female Chorus and Vln, Cl, Vlc, Pft(2001)
アニマIII
ANIMA III, for Female Chorus and Piano(2001)
森のいのち
FORESTS' LIFE, for Children's Choir, Glass Harmonica, 4 atrbn, pft(2004)**合唱**
協奏曲〈ビオス〉
CONCERTO FOR CHORUS "Bios", for Mixed Chorus a cappella(2007)
死者の贈り物I
GIFT FROM THE DEAD I, for Mixed Chorus a cappelle(2007)
死者の贈り物II
GIFT FROM THE DEAD II, for Mixed Chorus and Piano (2008)
宇宙になる
UCHU-NI-NARU, for Mixed Chorus and Piano (2008)

螺旋と霊性——本日のプログラムに寄せて ……………… 新実徳英

◉「螺旋」は宇宙の原理そのものだと僕は思っている。移動する自転・公転運動はつまりは螺旋であるし、ひょっとしたら我々の銀河も、百三十七億年前にできたこの宇宙も螺旋状に運動しているかもしれない。高校の生物の授業でDNAが螺旋状であることを習った時、「なんてことだ、なぜ？」と、ショックを受けたことをよく覚えている。そして今、生命は、そして音楽も狭い意味で広い意味で螺旋の中を進んでいくのだと僕には思われる。

◉では「日本的霊性」とはなにか。残念ながら僕にはこれについて言及する資格はない。しかしながら、日本の風土、歴史の中で、そして日本語で育って海外で暮らしたことのない自分にとって、自分はコスモポリタンではあり得なく、日本人そのものであり——これは自分がこよなく愛する西洋音楽と二律背反を起こすのであるが——自分の中に存在する「日本的霊性」としか呼べないものと向かい合わざるを得ないのである。そして日本の風土のあらゆるところから「日本的霊性」は立ち昇っているように感じる。このことを僕は二十年前に二ヶ月滞在したニューヨークで痛感した。

◉あなたの宗教は？と問われれば僕は縄文神道と答えることにしている。原始的な汎神教といってよい。万物に霊性が宿る。しかし、これは現代物理学のもたらした成果となんら矛盾しない。沙漠の砂一粒だって宇宙の子である。ならば万物に、もちろん人間にも、そして日本的な諸物・諸現象にも霊性が宿ってなんら不思議はない。みな生命体なのである。僕の音楽はそこから生まれるし、同時に世界のいろいろな民族とその根っこで少しずつ触れ合うものになっていくだろう。

◉音楽作品の全てがミクロコスモスである。そのミクロコスモスにマクロコスモスが投射されているか。つまりは宇宙の真理がそこに感知されるか否か。自分の作品が多少なりとも宇宙と、そして人間世界の投射であることを願う次第である。

プログラムノート
新実徳英

ピアノ トリオ――ルクス ソレムニス
PIANO TRIO "LUX SOLEMNIS"(2008)

自分の中の自然科学的宇宙観と仏教のそれとは別なものではない、と感じることが多くなった。仏の本質としての光(大乗仏教)あるいは「重々無尽」(孤立した存在はこの世に一つもない)といったような言葉、等々。私たちの生もそのようなものの一つとしてあるだろう。 Lux Solemnis(荘厳の光)はそのような仏教思想(とくに華厳経)に思いを馳せ、副題としたものである。

形式(Form)の見通しの全くないところからこの曲の作曲が始まった。次に何が来るべきなのか、まるで仏に問うように作曲を続け、ある時、来し方を振り返ってみるとこれはどうやら「螺旋形式」とでも呼ぶべき形を欲しているな、と気がついた。この宇宙も、あらゆる生命体も螺旋状に上昇する、という考えがあり、はからずもこの曲はそれを音楽の中に実現することとなった。

曲は続けて演奏される二章から成る。I、II章共に螺旋状、そして両章は一つのものである。

――全音現代音楽シリーズ一五「四人組とその仲間たち――室内楽コンサート」〈二〇〇八〉のプログラムより

ソニトゥス ヴィターリスI……ヴァイオリンとピアノのための
SONITUS VITALIS I, for Violin and Piano(2002)

音の闇から立ち上がろうとする音を聴く、その姿勢で作られたのが『アニマ――ソプラノとピアノのために』である。したがってその冒頭には音程も音階もない。そのヴァイオリン版がこの曲で、現在はV番まで作られ、もって完結している。

ヴァイオリン版では声と違って音程がないというわけにはいかないので、彷徨(さまよ)う音の運動で開始される。全体は一楽章形式。

二〇〇二年度ヴェネツィア・ビエンナーレの委嘱作品。

魂の鳥……フルートとピアノのための
THE SOUL BIRD, for Flute and Piano(1996)

鳥はしばしば飛翔の象徴であり、魂の実体化したものと考えられてきた。音にもまた、発せられた一音一音には生命＝魂が宿り、それらは宇宙に漂い、舞い、やがて飛翔していく。

今、私には音楽とはそのような音の集まりであるように思われる。私は私の書きとめた音たちがまさにそのようなものであるようにとの願いをこのタイトルに託した。ピアノの作り出す倍音の中にフルートはその生を生き始め飛翔へと向かっていく。曲は一楽章形式。

全音楽譜出版社委嘱作品。

――CD『光の園…新実徳英室内楽作品集』〈カメラータ、一九九八〉の作品解説より

風のかたち……ヴィブラフォンのための
SHAPE OF WIND, for Vibraphone(1990)

この曲の中心に流れているのは、尺八本曲から抽出された旋法で、それに私なりの変形が加えられている。これは私の風に因んだシリーズ――『風韻II』『風音(かざね)』、『風を聴く』、それに管弦楽曲『遠音』――に共通する音素材である。

私にとってヴィブラフォンとは余韻の楽器である。中空にゆらめきながら漂っては消えていく余韻の交わり、それらの作り出す「線のかたち」。それはまるで「風のかたち」のように捉えようのないものかもしれないが、しかし確かにそこに在る。風は遠くギリシャ、インドからも旋律の断片を運んできて、私たちのまわりの空気と優しく溶けあう。

上野信一さんと話し合っているうちに新たな打楽器独奏の作品シリーズの一つとしてヴィブラフォン・ソロに思い当った。[Vib×2+Kin]という楽器編成は上野さん、友人の作曲家西村朗さんに助言をいただいた結果である。

上野信一委嘱作品。

――「上野信一打楽器リサイタル」〈一九九〇〉のプログラムより

アンラサージュII……三人の打楽器奏者のために
ENLACAGE II, for 3 Percussionists(1978)

「アンラサージュ」とはフランス語で「纏わりつく」の意。各々の音群の纏わりつきから生まれるダイナミズム、生命の躍動を出現させたいと試みたもの。ちなみにI番は混声合唱とオーケストラによるもので、このあたりが私の出発点ということになろう。

I番での発想をより抽象化・純化(といってよいのだろうか)するため、このII番ではTom-Tomを中心とする膜質及び木質のみのモノクロームな打楽器アンサンブルとなっている。

久々にスコアを開いてみると、当時は全く意識しなかったにもかかわらず、ここにも音の渦→螺旋があり、我ながらあきれつつ驚くのである。

ヘテロリズミクス……六人の打楽器奏者のために
HETERORHYTHMIX, for 6 percussionists(1993)

このタイトルは私の造語によるもので[hetero + rhythm + mix]を合成したものです(hetero~は「異なった~」、homo~「同一の~」の反対語です)。もう少し詳しく説明すると、「原旋律・リズムと、それを異なる時間単位、異なる音高・音色へと変化させたものが、互いに重なり合って多層的複合的な音楽時間を作り出す」という概念です。たとえば┌┐,┌┐┌┐,┌┐┌┐などの同じリズム素材を重ね合わせることによる面白さをこの曲では最大限に拡大活用したのです。

全体は三部構成。第一部はリズムの発生、拡大とズレ。第二部は異なる速度を持つ各パートの絡み。第三部では異なる周期をもつ各々のリズム体が凝縮していきます。演奏する側からも聴く側からも「ノリ」の良い、楽しい曲にしたいと願って作曲しました。同じタイトルによるオーケストラ曲があります(CD『創造神の眼』〈FOCD2531〉に収録)。

フォニックス・レフレクション委嘱作品。

――CD『ケチャ』〈ムジカ・ヴィヴァンテ、二〇〇七〉の作品解説より

出演者プロフィール

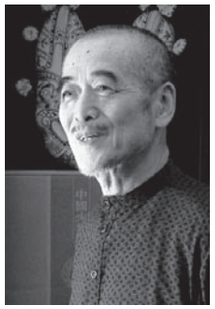
新実徳英 にいみとくひで

東京大学工学部を経て、東京藝術大学卒業及び同大学院修了。一九七四年、NET―TV作曲コンクール入賞。七七年、第八回ジュネーヴ国際バレエ音楽作曲コンクールで史上二人目のグランプリ、ならびにジュネーヴ市賞を受賞。八二年、文化庁舞台芸術創作奨励賞ならびに特別賞、八四年、文化庁芸術祭優秀賞、二〇〇〇年、第十八回中島健蔵音楽賞、〇三年、別宮賞、〇四年、CD『風神・雷神』が文化庁芸術祭大賞、〇六年、オペラ『白鳥（しろとり）』が佐川吉男音楽賞、〇七年、『協奏的交響曲』で第五十五回尾高賞を受賞。二十を超える管弦楽作品、ピアノ作品、多数の合唱作品、そして一連の室内楽作品等、活動の範囲は幅広く、それらはいわば大きな環を形成している。管弦楽作品の多くは、国内主要オーケストラにより演奏されているほか海外でも数多く演奏され、高い評価を得ている。また合唱作品の人気も高い。現在、桐朋学園大学院大学教授、東京音楽大学客員教授、桐朋学園大学音楽学部特任教授、同短期大学部非常勤講師。

北沢方邦 きたざわまさくに

音楽社会学、科学認識論、構造人類学専攻。桐朋学園大学教授、信州大学教授、神戸芸術工科大学・同大学院教授を経て、現在信州大学名誉教授。音楽社会学の著書に『メタファーとしての音』（新芸術社）、『北沢方邦　音楽入門』（平凡社）など。科学認識論関係の著書に『知と宇宙の波動』（平凡社）、『近代科学の終焉』（藤原書店）など。構造人類学関係の著書に『天と海からの使信』（朝日出版社）、『日本神話のコスモロジー』、『歳時記のコスモロジー』、『古事記の宇宙論』（いずれも平凡社）、『感性としての日本思想』（藤原書店）など。近著に平凡社新書『ヨーガ入門』がある。哲学・思想、現代日本や世界の政治情勢、古今の音楽、健康問題など、幅広い内容を鋭く解き明かす語り口には定評がある。

杉浦康平 すぎうらこうへい



グラフィックデザイナー、神戸芸術工科大学名誉教授。ポスター、ブックデザイン、ダイヤグラム、展覧会の企画・構成などの第一線で活躍。七〇年代より東洋と西洋のデザイン思考の統合を目指す作品を多数生みだす。アジアの図像研究の第一人者としても知られている。五五年、日本宣伝美術会賞、八二年、文化庁芸術選奨新人賞、九七年、毎日芸術賞などを受賞。同年、紫綬褒章を受章。編著に『ヴィジュアルコミニュケーション』『アジアの宇宙観』『日本のかたち・アジアのカタチ』『かたち誕生』『生命の樹・花宇宙』『宇宙を呑む』『宇宙を叩く』、対談集『アジアの本・文字・デザイン』、雑誌デザインを集めた作品集『疾風迅雷』など。

長尾洋史 ながおひろし…ピアノ

東京藝術大学、同大学院修士課程を修了。在学中に安宅賞を受賞。宗廣祐詩、遠藤道子、米谷治郎の各氏に師事。一九八九年第一回宝塚ベガ音楽コンクールで第一位優勝。九一年HIMES海外音楽研修者派遣選抜コンクール第一位。ソロ・リサイタル、室内楽、「東京の夏」「サイトウキネン・フェスティバル」をはじめとする音楽祭などにも多数出演。ソロCDに『長尾洋史プレイズ ラヴェル&ドビュッシー』など。現在、国立音楽大学准教授、東京藝術大学非常勤講師。

――Photo Michio Mogi

寺岡有希子 てらおかゆきこ…ヴァイオリン

東京藝術大学音楽学部付属音楽高等学校を経て同大学を卒業。一九九〇年第二回パオロ・ボルチアーニ賞国際弦楽四重奏コンクール第三位、合わせて特別賞受賞。九一年シュポア国際ヴァイオリンコンクール第五位入賞。九二年東京国際音楽コンクール室内楽部門第二位、合わせてアサヒビール賞受賞。九三年川崎音楽賞受賞。現在、紀尾井シンフォニエッタ東京、アール・レスピランのメンバー。桐朋学園芸術短期大学教授、昭和音楽大学非常勤講師。

永井由比 ながいゆい…フルート

フルートを野口龍氏に師事。桐朋学園短期大学、研究科修了。東京室内歌劇場のロシア公演、中国釣魚台国賓館での演奏、ISCM国際現代音楽祭での初演等、現代音楽分野で活発に活動する他、（財）地域創造「公共ホール音楽活性化事業」アーティストとして全国各地でワークショップ、リサイタル活動をしている。現在、村松フルートレッスンセンター新宿及び横浜、桐朋学園芸術短期大学講師。

上森祥平 うわもりしょうへい…チェロ

日本音楽コンクール第一位。ベルリン芸術大学留学。二〇〇五年ドイツ国家演奏家資格を取得し卒業。ドイツ三大Bシリーズでは、ベートーヴェン、ブラームスのチェロソナタを一夜で演奏、成功させた。〇八年全国でバッハ無伴奏チェロ組曲全曲演奏会を開催。東京交響楽団、東京シティ・フィル、大阪フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、小林研一郎、下野竜也の各氏らと共演。NHKBS・FM他出演多数。京都市芸術文化特別奨励者、東京藝術大学非常勤講師。

上野信一 うえのしんいち …ヴィブラフォン、パーカッション

国立音楽大学首席卒業。国立ストラスブール・フィルハーモニー打楽器奏者、国立トゥールーズ・キャピトル管弦楽団首席打楽器・ティンパニ奏者を歴任。二〇〇七年には国際打楽器芸術学会（PASIC）、同欧州大会での招待演奏、〇八年には作曲家・ピアニスト高橋悠治とのデュオ・リサイタルなど、現代音楽の演奏家として国内外で積極的に活動している。ソロCDに『プサッファ・二〇世紀打楽器芸術集vol.1』がある。現在国立音楽大学非常勤講師。

フォニックス・レフレクション

上野信一を中心に、国内外で活躍するソリストたちにより一九八七年に結成されたパーカッション・グループ。現代音楽、ラテン、メンバーのオリジナル作品など、幅広いレパートリーを誇り、その音楽性は高く評価されている。

石井喜久子

国立音楽大学卒業。第四回打楽器新人演奏会グランプリ受賞。打楽器奏者として多岐にわたる音楽シーンで活躍中。洗足学園音楽大学准教授。岡田智之打楽器合奏団、アンサンブル・マリンバーナ所属。

大高達士

国立音楽大学首席卒業。一九九〇―九三年にシエナ・ウィンドオーケストラのティンパニ奏者。その後フリー。タレントのツアー、ショー、舞台、TV収録、スタジオ録音など多方面で演奏活動する傍ら、指揮者としても活躍中。

大前和音

広島県出身。国立音楽大学入学後、クラシックの他にジャズやポップスにも力を入れて活動。第三十八回山野BIG BAND JAZZ CONTESTにドラムで参加、最優秀賞受賞。現在、フリー奏者として演奏やレコーディングを行う他、ドラマーとしても活動中。

荻原松美

国立音楽大学卒業。在学中よりシエナ・ウインドオーケストラに入団、ティンパニおよび打楽器奏者として現在に至る。他楽団のエキストラプレーヤーとしても活動している。長野県小諸高等学校音楽科非常勤講師。

小田もゆる

国立音楽大学卒業。第十四回読売中部新人演奏会、TEPCOコンサート、JT PLAZA等に出演。岡田知之打楽器合奏団、トレイルズブレーザーズ、テンピースブラス、竹楽器集団「竹鼓舌」に所属。東京成徳大学、同短期大学非常勤講師。

新田初実

国立音楽大学卒業。スカイパーフェクトTV主催スーパークラシック・オーディションアンサンブル部門第一位。マリンバデュオMARSとして、"Love Our Planet"（エピックレコード）等レコーディングに参加。二〇〇七年、横浜ボルドー音楽祭に出演。

峯崎圭輔

国立音楽大学およびアドヴァンスドコース卒業。第十六回日本クラシックコンクール全国大会第二位、ガラコンサートに出演。第二十九回TIAA全日本クラシック音楽コンサート優秀賞。打楽器の指導やアンサンブルの作曲にも活躍中。

三宅まどか

国立音楽大学首席卒業、卒業演奏会に出演。読売新人演奏会出演。二〇〇七年、JSPMS主催「若き精鋭たちによる打楽器の饗宴」に出演。パーカッションユニット"Tuk-Pax"を結成。各種コンサートやイベントに参加する等精力的に活動中。

bluemallet

PERCUSSION SHOP

bluemallet（ブルーマレット）は打楽器・楽譜を販売しています。
またティンパニ・スネアドラム等打楽器のメンテナンスも承っております。
ご質問、ご要望等ありましたら、お気軽に下記のメールからご連絡ください。
ホームページ　http://www.bluemallet.com (リニューアルしました)
お問合わせ先　info@bluemallet.com
ブルーマレット株式会社
176-0024　東京都練馬区中村３－３１－８　(店舗はございません)
Tel&Fax 03-3577-6063

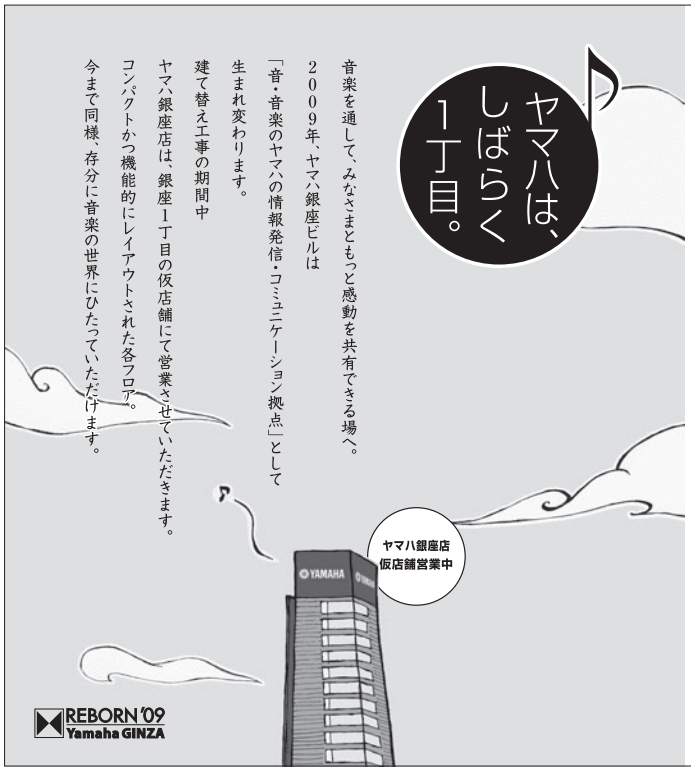
和モダンでお洒落な大人系居酒屋

えん屋　新高円寺店

杉並区梅里１－６－９　浅賀ビル２Ｆ

TEL 03-3318-7895
営業時間 17：00～4：30（L.O.3：30）
定休日 無休
東京メトロ丸ノ内線新高円寺駅南口より徒歩1分

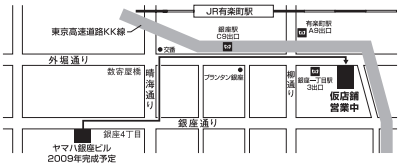
各CDショップ、インターネット・ショップにて、好評発売中!!



YAMAHA
感動を・ともに・創る

FLOOR GUIDE

8–9F アトリエ東京
7F 事務所
6F サロン
5F 事務所
4F 管楽器／打楽器
3F ピアノ／アビテックス（防音室）
2F 楽譜／音楽書
1F CD／DVD
エレクトーン／電子ピアノ／キーボード
B1 弦楽器／ギター



● **仮店舗での営業　2009年まで**
〈営業時間〉10:45～19:00
〈定休日〉　不定休
東京都中央区銀座1-3-13　TEL. 03-3572-3171（代）

ヤマハ銀座店
www.yamahamusic.jp/ginza-s/

Works of Tokuhide NIIMI published by Zen-On Music

新実徳英　出版作品

■鍵盤楽器
夕闇の中(2台ピアノ)
かみさまのいろいろ(ピアノ独奏)
三つのワルツ(ピアノ連弾)
旋法の虹 I、II、III(2台ピアノ)
メリカントによる2つの小品
(2台ピアノ用編曲)
あゝ　パッハよ！(ピアノ独奏)
収録楽譜「PIANO 2000 (CD付)」
マーチS(ピアノ独奏)
収録楽譜「PIANO 2006 (CD付)」
アリランから未来へ(ピアノ独奏)
収録楽譜「アリランの主題による変奏曲集」
風の螺旋(オルガン)
収録楽譜「現代オルガン曲集 1」

■声楽
アニマ I (ソプラノとピアノ)

■合唱
風の雅歌(無伴奏混声合唱)
混声合唱組曲〈滄海よ うたって〉
合唱協奏曲〈ビオス〉
魂の樹(無伴奏女声合唱)
光の樹(無伴奏女声合唱)
五つのシャンソン(女声合唱とピアノ)
サランヘヨ(女声合唱とピアノ)
五つのポップソング(女声合唱とピアノ)
六つの小唄(女声合唱とピアノ)★
五つのジャズソング(女声合唱とピアノ)★

■室内楽
風音(cl、vln、vlc)
弦楽四重奏曲(vln、vla、vlc、pft)
魂の鳥(fl、pft)
妖精の輪(cl、pft)
メロス II(fl、gtr)
ルクス・オリジーニス(vln、cl、vlc、pft)
ソニトゥス・ヴィターリス I(vln、pft)
ソニトゥス・ヴィターリス II(vln、pft)★
ソニトゥス・ヴィターリスIII(vln)
クラリネット・スパイラル(2cl)
舞踊組曲-I Love Lucy-(2vln)
ソニトゥス・ヴィターリスIV、V(vln、pft)
ピアノ三重奏曲 ルクス・ソレムニス
(vln、vlc、pft)★

■箏
秋のパッサカリア(文化箏独奏)
収録楽譜「文化箏で奏でる日本の歌」

■打楽器
マリンバのためにI&II(マリンバ独奏)
ヘテロリズミクス(6人の打楽器奏者のために)
風のかたち(ヴィブラフォン独奏)

■管弦楽
〈交響曲第2番〉混声合唱とオーケストラのために
オーケストラのための〈ヘテロリズミクス〉
小オーケストラのための〈生命連鎖〉
ピアノとオーケストラのための〈創造神の眼〉
〈風水〉弦楽合奏、打楽器とチェレスタのために
〈宇宙樹-魂の路-〉二十絃箏とオーケストラのための
〈焔の螺旋〉オーケストラのための
〈風神・雷神〉大和太鼓、オルガンとオーケストラのための
〈沈黙へ〉弦楽オーケストラのための
〈太陽風〉オーケストラのための
〈アニマ・ソニート〉★★
ヴァイオリン協奏曲〈カントゥス・ヴィターリス〉
管弦楽組曲〈森は踊る〉世界中の子どもたちへ
協奏的交響曲〈エラン・ヴィタール〉

■オペラ
シンフォニック・オペラ〈白鳥〉★★

★出版準備中(近刊)　★★未出版(レンタル扱いのみ)

株式会社　全音楽譜出版社　〒161-0034 東京都新宿区上落合2-13-3　TEL.03-3227-6280　FAX.03-3227-6288　http://www.zen-on.co.jp

［連絡先］—知と文明のフォーラム 東京支部　TEL/FAX 03–5477–2977